

私の相棒

代田中・2 坂本 千遥

時が流れるにつれ

私の足にびったりと馴染んだ

履けば不思議と安心感

この柔らかさ

まるで体の一部のような

君と出会ったのは三年前

初めは不仲そのものだった

歩きにくいし

先が尖っていて足が痛い

靴だけ立派 不釣り合いな私達

君の存在は空気のように

居て当たり前

特別なものじゃない

ジャンプもターンも初めての技も

君と一緒に覚えた

何をやってもできなくて

できたと思ったらまたできなくなつて

全然上達しなくて

でも毎日毎日黙って私に付き合ってくれた

今ではジャンプもターンも誰にも負けな

君の存在は空気のように

居て当たり前

特別なものじゃない

一年やってもできなくて

二年やってもできなくて

三年やってもできなくて

夢に手が届かない

そんなときも君と一緒にだった

私が泣いているときは

きっと君も泣いてくれていた

友達と過ごした練習の日々

励まし合い、競い合い

絆を深めたときも

君と一緒にだった

君の存在は空気のように

居て当たり前

特別なものじゃない

だけどこの夏

君は大けがした

まさに再起不能

左足の靴に三センチほどの大きな穴

君が去年から

けがをしていることを知っていた

母に買い替えを勧められたけれど断った

居て当たり前の君

だから別れるのが怖かった

なんでも一緒に乗り越えてきた私の相棒

そんな存在であったことに

初めて気づかされた

新しい相棒とうまくやっていけるのか

不安しかない

だけど君は紛れもなく私の相棒だ

まだお別れはできないけれど

今度は私のそばで見守っていて